スライド説明会資料

平成 28 年 5 月 21 日（土）

十宮古里遺跡（第５次発掘調査）

所 在 地　鈴鹿市十宮四丁目１０６４－１　外８筆
事業主体　鈴鹿市教育委員会
調査目的　宅地造成工事に伴う埋蔵文化財の記録保存
調査期間　平成２７年６月２５日～平成２７年１２月１０日
調査面積　２，９４８㎡
調査主体　鈴鹿市（鈴鹿市考古博物館）
調査担当　吉田　隆史
調査協力　株式会社四門

図１　十宮古里遺跡と付近の主な遺跡位置図

※国土地理院地形図２万５千分の１「鈴鹿・亀山」を使用（任意縮尺）

◆１　位置と環境（図１・２）

十宮古里遺跡は鈴鹿川中流域の右岸において，東西約 1000 m×南北 400 mの島状に独立した低位段丘とその縁辺部に位置する（図 1）。標高は約 10 mを測る。鈴鹿川中流域の左岸が標高 30 ～ 40 m程度の丘陵地形を呈するのに対し，右岸には鈴鹿川の谷底平野が広がり，旧河川によって形成された低位段丘が存在する。この地域は古くから開かれたものと考えられ，人々による営みが連綿と確認されている。

弥生時代前期には，鈴鹿川右岸の谷底平野に存在する八重垣神社遺跡の旧河道から，多量に土器が出土している。左岸段丘上の一反通遺跡は，前～後期に継続して営まれた遺跡で，この流域における弥生時代の拠点的集落として位置付けられている。中期には左岸段丘上の中尾山遺跡及び寺山遺跡，扇広遺跡にて集落が営まれ，右岸低位段丘東端の須賀遺跡では中期前葉頃の大溝が検出されている。後期～古墳時代初頭に降ると，左岸段丘上の磐城山遺跡及び南山遺跡，青谷遺跡，右岸低位段丘上の十宮古里遺跡で集落が形成される。十宮古里遺跡の東側に隣接する萱町遺跡においても，後期の赤彩された土器が確認されている。

古墳時代前半の集落の様相については不明な点が多く，右岸谷底平野の八重垣神社遺跡で前期の集落と墓域，宮ノ前遺跡で集落が部分的に確認されている程度である。左岸段丘上には数多くの古墳が造られ，墓域としての性格が強い。鈴鹿川を臨む丘陵端に位置する寺田山 1 号墳は，鈴鹿川流域で屈指の規模を誇る前方後円墳であり，この流域を支配した有力君主の墳墓であるものと想定されている。後続する富士山 1 号墳も全長約 50 mの前方後円墳である。左岸段丘上には，中期に小首長を被葬したと見られる比較的小規模の古墳が点在し，後期には大谷古墳及び蛸田古墳の横穴式石室を備える古墳や中尾山古墳群及び沖ノ坂古墳群などの群集墳も確認できる。この頃には，磐城山遺跡や境谷遺跡にて集落が経営されるようになる。右岸谷底平野では，河田宮ノ北遺跡や宮ノ前遺跡の旧河道から，中～後期の遺物が多量に出土している。

古代律令期においては，この地方は河曲郡に該当し，左岸段丘上には河曲郡衙推定地の狐塚遺跡，伊勢国分寺・尼寺を始めとして，白鳳寺院が推定される南浦遺跡，計画的な配置状況を示す掘立柱建物群が確認された木田坂上遺跡等の重要遺構が密集しており，河曲郡の中心となる地域であったものと捉えられる。

古代末～中世前半の時期には，集落域を具体的に特定できるような成果に乏しい状況である。

中世後半以降に降ると，左岸段丘上に織田信長軍の攻勢に長く耐えた高岡城，土塁や堀の痕跡を留める木田城が築かれる。十宮古里遺跡から南方へ約 1 ｋm隔絶する神戸城は，1550 年前後の神戸具盛のときに沢城から移ったものとされ，四方を土塁で囲み，小丘を利用した平山城であったと推定されている。織豊期には信孝が入り，1580 年の拡張時に五重の天守閣を築いたものと考えられている。

以上のように，この地方の遺跡は鈴鹿川を臨む北部の丘陵から，南部の谷底平野とこれに面する自然堤防上の微高地を中心として広く展開しており，複数の時期にまたがる重要な知見を内包するものとして貴重な資料である。

このように，十宮古里遺跡の周辺には重要な遺跡が分布しており，大変貴重な情報を含む地域であると考えられる。十宮古里遺跡では過去に 4 次に及ぶ発掘調査が実施されており（図 2），特に 1 次調査では古墳時代初頭を中心とする大溝及び方形周溝墓群，古墳時代後期の竪穴住居及び溝，中世～近世初頭の土坑及び井戸などが検出されている。多量の土師器に加えて，須恵器及び陶器，瓦等が出土し，重要な成果が得られている。2 次調査でも中世～近世初頭の井戸及び区画溝等が確認されており，この時期の遺構が面的に展開することが分かる。今回が 5 次調査になるが，1 次調査と同様に旧神戸中学校の敷地内を対象とする。そのため，大溝の北続きや同時期の集落の様相，そして神戸城に関連する時期の遺構の検出等，非常に興味深い成果が得られる可能性が高い箇所であると想定された。

◆２　調査の成果（図２・３）

調査は平成 27 年 6 月 25 日に着手し，発掘作業員延べ 698 名を投入し，平成 27 年 12 月 10 日に終了した。調査区は既存する建物の基礎によって分断されるため，敷地全体を 1 ～ 18 区に分割している。5 次調

査では教室棟西半の下面となる 6 区，昇降口の 8 区，教室棟の 9 区，ポンプ室の 10 区，中庭及び建物周辺の 11 区を調査した（図 2）。対象面積は 2,948㎡である。平成 28 年度には運動場北部の 17 区において，6 次調査を予定している。

【十宮古里遺跡概観】

十宮古里遺跡は，鈴鹿川の右岸に形成された谷底平野に面する微高地を中心として立地し，周囲には鈴鹿川が何度も氾濫をした際の河道が存在するものと考えられる。5 次調査区はこの低位段丘の縁辺部に該当するが，調査の結果，井戸 32 基及び廃棄土坑 1 基，複数の溝及び土坑，ピット，流路等を検出した（図 3）。多数の井戸を確認しているものの，具体的な建物等は検出されていない。遺物は中世～近世初頭のものが主体となるが，縄文時代や古墳時代初頭，7 世紀代や 9 世紀代に遡る遺物も出土している。

①古墳時代

十宮古里遺跡における遺跡の初源は，古墳時代初頭頃である。代表的な遺構は，1 次調査区中央～北東部で検出された大溝 SD1 と方形周溝墓 SX01 ～ 05 である。SD1 からは，この時期に比定される甕及び壺，高坏，ミニチュア土器等が多量に出土しており，完形に近い製品や据え置いたような出土状況を示すものも存在する。水辺における祭祀行為を示す可能性のある興味深い資料である。大溝の東側には，同時期～やや降る時期の方形周溝墓が 5 基造られている。この時期の建物等による集落域は特定できていない。

やや時期を隔絶した古墳時代後期には，1 次調査区の南西部に竪穴住居 SH1 と溝状遺構 SD5 及び土坑群が分布する。1 次調査の SD5 には，6 世紀初頭～前半に比定される須恵器等が多く詰め込まれるような出土状況が見られる。1-2 次調査区でも同時期の竪穴住居が検出されており，この時期の集落がより西方に広がることが想定される。

5 次調査区ではこの時代の遺物が若干出土したのみで，明確な遺構は検出されておらず，大部分が河道になっていた可能性がある。

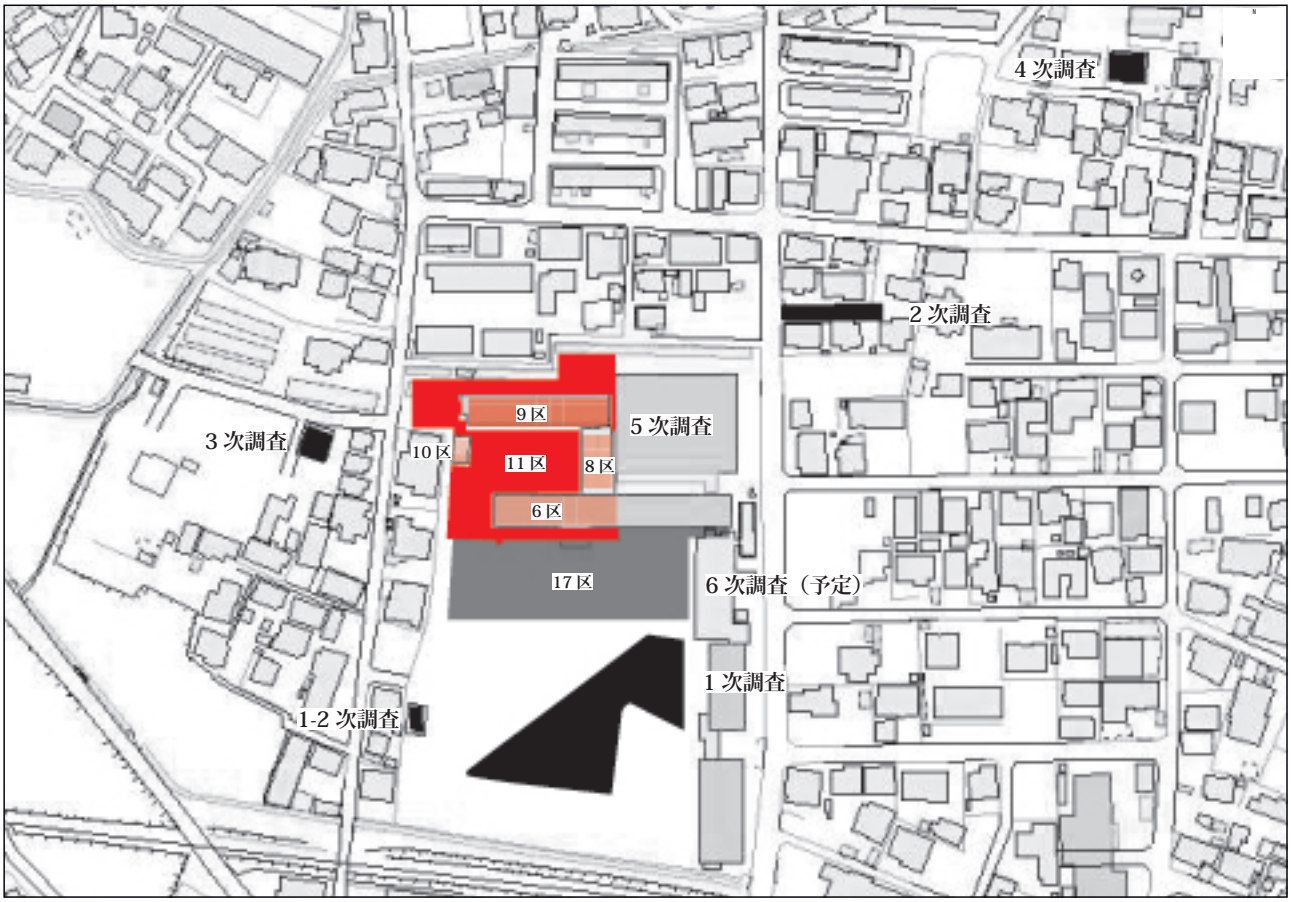


図 2　調査区配置図（S=1：2,500）

②古代

7 世紀に井戸 SX5069，9 世紀に井戸 SX5079 が造られ，5 次調査区の南部に点在する様相を示す。SX5069 は 5 次調査区内の遺構の初源であり，底面のほぼ中央部分を掘り窪めた上で，一木の丸太材を刳り貫いた木製品が据えられている。井戸底における水溜施設であり，集水機能をもつものと判断される。

この時期には，段丘縁辺の 5 次調査の 6 区付近では，河道が埋没して沖積地となっていたことが分かる。

③中世～近世

中世前半の鎌倉期には，河道の埋没範囲の広がりに合わせて，集落域を拡張させたものと推察される。1 次調査区ではやや希薄な印象であるが，5 次調査区では井戸 SE5001・2・5・15・21・58・73・74・80 等，調査区の北部と南部に大きく二分されて配される。SE5073 の底面には古代の SX5069 と同様に，丸太材を刳り貫いた水溜施設を検出している。SX5069 のものより大型であるが，木材は部分的に欠落しており，板材や杭材にて補強した痕跡が観察可能である。

遺構の空白地帯となっている 5 次調査区の南西部から中央部，北東部の一部にかけては，遺物の出土も乏しい。南西方向から北東や東方向へ分岐するような規模の大きい河道が存在した可能性が高いと考えられる。

中世後半～近世に降る時期には，生活の痕跡が更に色濃く認められ，井戸 SE5013・14・18・20・28・29・31・41・43・44・53・56・61・62 ～ 64・67・71・72・83，溝 SD5006・9・11・77・84，廃棄土坑 SX5042，土坑 SK5007・8・59・60，ピット 1・6・9 等が 5 次調査区のほぼ全面に配置される。

この時期になると，5 次調査区のみならず，1 次調査区の中央～北部や 2 次調査区にまで遺構が広く検出されている。河道範囲の大部分が埋没する時期に相当するものと考えられ，集落域が広範に及ぶことが分かる。

◆ 3　遺物

コンテナバット（W59 × D38.6 × H20.7㎝）に 45 箱分で，合計約 241.6㎏の量の遺物が出土した。

中世～近世初頭の山茶碗製品及び土師器に加えて，天目茶碗及び皿，甕，壺，鉢，瓶等の陶器類が主体となるが，縄文土器及び 7 世紀代の土師器及び須恵器，9 世紀代の土師器及び灰釉陶器なども出ている。また，井戸から出土した大型の木製品は注目される。調査面積と 1 次調査の結果を勘案すると，全体的な出土量はそれ程多くはないが，非常にバリエーションに富んだ内容となった。

現在は整理作業を継続している段階のため，詳細を掴みきれてはいないが，土師器羽釜は多量に出土しており，また多様な陶器類も見られるため，入念に時期考証を行う必要がある。

【主な出土遺物】

①土　器：縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器。

②陶　器：灰釉陶器，山茶碗，山皿，常滑焼，古瀬戸，瀬戸美濃産陶器。

③その他：青磁，白磁，瓦，瓦質土器，鉄製品，木製品など。

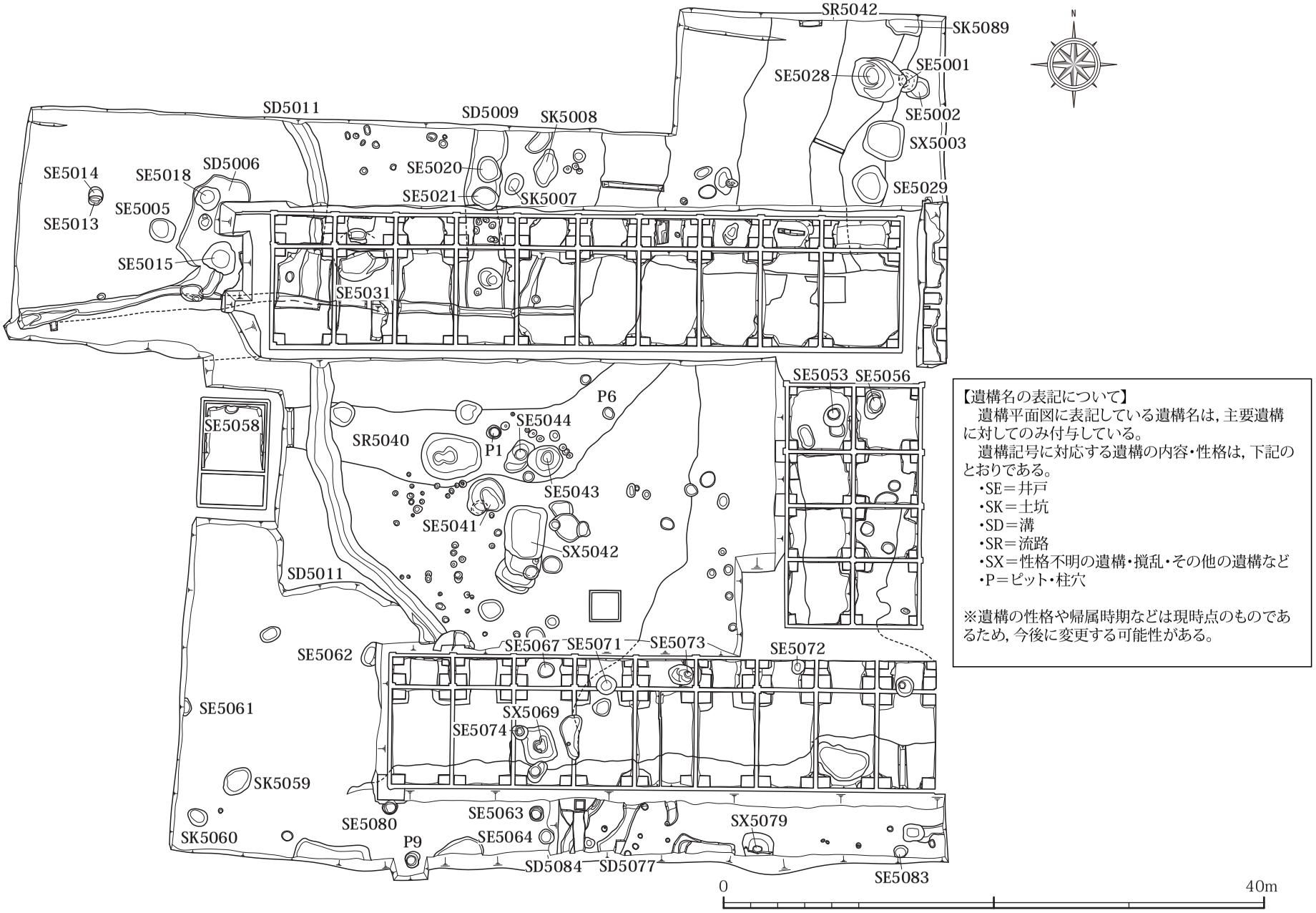
※備考

掲載内容は全て平成 28 年 5 月 21 日現在の情報となっています。現地調査は既に終了していますが，将来的な報告書作成に向け，遺構及び遺物の整理・検討作業を行う予定です。今回は現時点における調査の概略を報告させていただきますが，最終的な内容には変更が生じる点がありますことをご了承ください。

鈴鹿市考古博物館　～ Suzuka Municipal Museum of Archaeology ～

〒 513-0013
三重県鈴鹿市国分町 224 番地
T E L　059-374-1994
F A X　059-374-0986
E-mail　kokohakubutsukan@city.suzuka.lg.jp
U R L　http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/

観 覧 料　一般：200 円　小・中学生：100 円
※ 20 名以上の団体は 50 円引き
開館時間　9：00 ～ 17：00　※入館は 16：30 まで
休 館 日　毎週月曜・第３火曜日・祝休日の翌日
※祝休日・振替休日は開館
年末年始：１２月２７日～１月４日



【遺構名の表記について】
遺構平面図に表記している遺構名は，主要遺構に対してのみ付与している。
遺構記号に対応する遺構の内容・性格は，下記のとおりである。
・SE＝井戸
・SK＝土坑
・SD＝溝
・SR＝流路
・SX＝性格不明の遺構・撹乱・その他の遺構など
・P＝ピット・柱穴

※遺構の性格や帰属時期などは現時点のものであるため，今後に変更する可能性がある。

図3　遺構配置図（1/400）

調査区　全景（真上上空から）　※上が北方向

調査区　遠景（南上空から）

6 区　井戸群全景（真上上空から）　※上が北方向

6 区　井戸 SX5069 完掘（北から）

6 区　井戸 SE5073 完掘（西から）

8 区　井戸 SE5053 完掘（北東から）

8 区　井戸 SE5056 完掘（北から）

11 区　井戸 SE5005 完掘（北から）

11 区　溝 SD5011 完掘（南から）

11 区　井戸 SE5015 完掘（北から）

11 区　井戸 SE5018 完掘（北から）

11 区　廃棄土坑 SX5042 掘削状況（南から）

11 区　廃棄土坑 SX5042 完掘（北西から）

11 区　井戸 SE5083 完掘（北から）

11 区　土坑 SK5089 遺物出土状況（南から）